

2024年（令和6年）度  
一般編入学試験B日程 問題  
小論文

2024年2月6日 実施

【解答上の注意】 答えは別紙解答用紙に、左横書きで書いてください。  
この問題用紙の余白や裏面を下書きなどに利用してもかまいません。

《課題文》

これまで人々は労働によって対価を得て、それによって生計を立ててきた。労働が人々を集め、共に生きる意味をもたらしてきた。しかし、AI やロボットが多くの労働を担うようになれば、労働の質が変わるし、多くの人は労働によって収入を得る必要がなくなる。最低限所得保障であるベーシックインカムを導入が議論されているが、これからはすべての人に対して、生活に必要な資金（または物資）が平等に配られる時代が来るかもしれない。

そんな時代にどのようなコミュニティができるだろうか。

まず、情報化時代には人の動きが加速するだろう。所有物が減れば動きやすくなるし、シェアが増えれば一か所に定住する必要もなくなる。

では、コミュニティも SNS を通じてつくられ、維持されるようになるのだろうか。おそらくそうはならないだろう。SNS は通信手段として利用されるだろうが、コミュニティには「認め合いの起きる場所」が不可欠だからである。そこはインターネット上のヴァーチャルな空間ではなく、自然が豊かで多様性に富む、画一的な予想ができない場所であってほしい。未来のコミュニティは個人がそれぞれ個性を持った存在として認め合わなければならず、そのためには個性を発揮できる多様な環境が不可欠である。インターネットの均質的な空間と違い、常に姿を変え、時間とともに移行行く自然は私たちの予想を裏切り、人々の直観力を導き出して個性を発揮させる。そこには新たな創造が生まれる契機が潜んでおり、コミュニティを刷新させ、活気づかせる原動力がある。

未来の社会は労働ではなく、自身の承認欲求を満足させるようなボランティア活動が人々の生きる意味となるだろう。そして、人々はそれぞれ複数のコミュニティに属し、それらを渡り歩いて過ごすようになる。これまでのような成長—教育—仕事—趣味といった単線的な人生ではなく、それらを同時に実践するような複線的な人生が主流になるはずだ。

そこで重要なのは、コミュニティの規模をむやみに大きくしないことだ。

— 中略 —

現代人の脳の大きさは150人ほどを上限とした集団で暮らすようにできている。脳の大きさと集団規模の相関関係は言葉が登場する前にできたもので、信頼関係は身体を通じてしかつけれないことを示している。その後に集団規模を拡大できたのは言葉のおかげだが、それは未だにヴァーチャルな関係しかつけれない。繰り返しになるが、「認め合い」が起きるには場所が必要だし、さらにその数には限りがあるのだ。

一つ一つは小さくても、個人が複数のコミュニティに属することで、さまざまなコミュニティがつながりを持つ「多極社会」ができる。そのうえで“Think globally, act locally”から、“Think locally, act glocally”へと進める。そういったコミュニティの複合がそれぞれの「場所」である自然との関係を大切にし、地球環境の保全に協力すれば、大きな力になるはずだ。現在の温室効果ガス削減目標のような国単位のものではなく、世界中の人々の信頼関係によって合意された削減目標ならば、必ず実行に移せるはずだ。

日本は今、人口減少と少子高齢化に直面している。さらに、人口の都市集中によって地方の過疎化が進み、限界集落が急増すると予想されている。しかし、少子化の傾向が顕著なのは東京などの大都市であり、人口の地方分散が実現すれば出生率は上がるという試算もある。

（山極壽一著『共感革命：社交する人類の進化と未来』より）

《問題》

課題文を読み、以下の指示に従って答えなさい。

(1) 筆者は、未来のコミュニティには「認め合いの起きる場所」がどうしても不可欠であると考えているか。

200字以上300字以内で解答欄①に書きなさい。

(2) 次の問いへの答えを、300字以上500字以内で解答欄②に書きなさい。

問：未来の「多極社会」における行動指針として筆者は、“Think locally, act glocally”を掲げている。

これは、どのようなコミュニティが考えられるか。筆者の見解を踏まえた上で自らの考えを述べなさい。